

新潟県東蒲原群鱒谷ムラの伝承の分析

波平, 恵美子
九州芸術工科大学

<https://doi.org/10.15017/2235361>

出版情報 : 九州人類学会報. 14, pp.5-7, 1986-06-25. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

新潟県東蒲原郡鱒谷ムラの伝承の分析

波 平 恵美子

鱒谷ムラは、新潟県と福島県の県境に近い山間のムラである。阿賀川の支流T川に沿って20キロメートル余さかのぼる、その谷最奥のムラである。周囲は山々に囲まれ、隣村との距離は約8キロメートルで、その谷に並ぶ村落の中でも最も孤立した位置にある。年間の積雪量は10メートルを越え、現在でも12月初めから3月末までは公共の交通機関であるバスも、中学校のスクール・バスも運休する。10年程前までは隣村とを結ぶ道路は雪のため自動車での交通は冬の後半、雪が降り積ってからは途絶したが、現在では除雪作業が円滑に行なわれているので、冬期でも雪のため孤立するような日は、年間数日にしかすぎない。32戸のうち半数以上が自家用車を持っているので、ムラの人々の意識では、自分のムラがそれほど山奥の孤立した村落であるとのことはない。しかし、T川沿いのムラムラや東蒲原郡最大の町であり、経済行政の中心地であるT町では、今でも鱒谷ムラがいかに辺鄙なムラであるか、最近まで周辺のムラにはないような大家族制を営んでいたかなどを語り、特異な村落であるかのようなイメージを持つ人々が多い。

わずか32戸の小さなムラであるにもかかわらず、T川沿いの人達に鱒谷ムラのことを語られる頻度が高いのは、谷の最奥のムラであることだけではなく、このムラの生業によるところが大きいと考えられる。明治20年代から昭和20年代まで、鱒谷ムラは木材の伐採を行ない、T川の増水期を利用してT町まで木材を流した。そのため、谷川沿いのムラムラに丸木の溜め場を設け、その土地の人を人足に雇い、時には争いごとを起して、常に話題を提供していたようだ。所有する田はわずかに20ヘクタールであるが、材木の値段の良い時期には好況に湧き、谷沿いのムラムラからこの最奥のムラに人が集った。鱒谷の生業を支えているのは6,000ヘクタールとも言われる広大な共有林であり、この面積は東蒲原郡でも最大のものである。昭和30年代に入ってから、木材伐採と並んでこのムラの経済を支えているものはゼンマイ採りであり、五月初旬のわずか10日間で、家族数の多い家では500万円の収入があるという。従って、1戸当りの収入は、最奥の辺鄙なムラであるというイメージとは逆に、谷沿いのムラでは最高であるとも言われ、そのこともまたT川沿いの村落やT町の人々に話題を提供することになっている。

T町や谷沿いのムラの人々が鱒谷ムラについて語る時、必ず口にするのが「鱒谷100かまど」の話である。この伝承はまた鱒谷の人々がよそから来た者に必ず聞かせる話であり、それは次のようなものである。

昔、この鱒谷は大変栄えたムラであり、T川の東岸に50かまど、西岸に50かまどの計100かまどがあった。しかし天明の飢饉の折多くの人々が死に絶えた。それ以降、このムラの掟によって20かまど(20戸)以上は戸数は増やさないことになった。事実、明治中期までは20戸しかなかった。

以上の話が鱒谷の人によっても谷沿いのムラムラの人によっても最もよく語られる内容である。鱒谷に100かまどが存在した頃についてはこのムラに現存する旧庄屋の家(肝煎=キメイドン)の屋号を持つ)には次のような話が伝わっている。

その当時、東岸の肝煎と西岸の肝煎がいた。西岸の肝煎は自分の家の先祖であったが、東岸の肝煎はスルガという家が務めていた。スルガの家がカモノスケという人の代になった時、自分一人で鱒谷の肝煎を務めたいという野心を抱き、ある時自分の家の先祖のタエモンという人を宴会に招き、毒殺しようと計った。タエモンは宴のなかばで苦しみ始めたが急いで我家に帰り、日頃信心している虚空蔵さまに願かけを

し、「もし私の命を助けて下さったならば、立派な御堂を建立します」と言った。願いが叶い命が助かったのでお堂を建てた。それが現存する西岸の虚空蔵堂である。

ムラ内の他家の人々は、東岸と西岸とにそれぞれ肝煎がいたこと、両家は互いにライバルで仲が悪かったことまでは語るが、スルガカモノスケがタエモンを毒殺しようとした話までは語らない。

ところで、100かまどが20戸までに減ってしまったことについては別の伝承がある。以下の伝承を語るのは旧庄屋の家であるキメイドン以外に数軒しかない。それぞれの話はいくらずつ異なっているが、キメイドンの家に伝わるものがもっとも詳しいので次に記す。

鱒谷ムラの東岸の上方には「大沼」と呼ばれる沼がある。現在は水が干上がって小さくなったが、以前は大きな沼であった。またこの沼は以前はより山の上の方にあったとも考えられる。ある時、東岸の肝煎であるスルガカモノスケの夢に大沼の主が現れて、「私は今いる所から抜けて出たいが、お前の家の水屋（台所）の柱三柱が邪魔になって抜け出ることができない。そこで、もし私の願いをきいて水屋の柱（ミジャバシラという）をくれるなら、私はお前に末代までの長者の暮らしをさせてやろう」と言った。カモノスケは喜んで柱を与えたところ、ある日、鉦や太鼓・三味線のおはやしの音とともに大沼が抜けてきた（決壊した）。丁度その時対岸の西岸の集落の上方に今も位置する田で仕事をしている西岸の肝煎、タエモンがこれを見つけ叫んだ。「カモノスケ、カモノスケ、大沼が抜けてきているではないか。何をしている、早くジャグイ（蛇杭、2尺5寸の小刀）を打て」というと、カモノスケは仕方なく沼の主（これは竜とも蛇ともいい、美しい女の姿になって現われるという）にジャグイを打った。そこで大沼は抜けてくるのを止めて、大沼は現在の位置にとどまった。しかしカモノスケが大沼の主との約束を破ってしまったためにその祟りによって東岸の50かまどは消失してしまった。これが、かつてT川の両岸に集落が存在したのに現在は西岸のみに集落がある理由である。

以上の伝承のヴァリエーションはそれぞれ異なる家の人々によって語られるが、以上の話とは東西の重要な方向がまったく逆になった話がある。但し、この話を伝えていた婦人は10年ほど前に90才で亡くなっているので詳しいことはわからなくなってしまった。

この話が上記の話と異なるのは次の点である。

- ①大沼が抜けたのではなく、大沼の主の意にそむいて、東岸から西岸に抜けて出たいと願う別の沼があった。
- ②もう少しで、その小さな沼は西岸に移り住むことが叶う時に、東岸の人々がそれを見つけ大騒ぎをして、ジャグイを打てと叫んだので、西岸の人々はやむを得ずジャグイを打った。そのためにその沼は西岸へ移ることなく東岸に留まってしまった。

以上の相違は、実はこの伝承が鱒谷の自然環境や農耕との係わりを持って語られているという仮定に立つと、前者の話と、後者の話とはまったく異なる内容を語っているものであり、単なる伝承のヴァリエーションではないことがわかる。それは次のような理由による。

- ①鱒谷の水田20ヘクタールのほとんどは、集落のある西岸の、集落の上方にかたまってあり、これは河岸段丘の上に作られたものであるという。田のさらに上方、山へ向っては、かつては焼畑を行なった30～50ヘクタールの畑地があり、水が豊富であればこの畑地を水田に開墾することも可能であるといわれる。しかし、東岸側の山よりも山が浅く、水系がはるかに乏しいため、20ヘクタール以上に水田を増やすことは、

非常に大がかりな灌漑工事をしなければ不可能であるという。一方、東岸の山は深く、水は豊富であるが、地質が軟弱でこれまでも度々地すべりが起り、川岸にわずかな畑と水田が存在するのみである。

- ② 1800年代初めに編纂された『会津風土記』には、東岸5戸、西岸16戸が存在したと記されていて、伝承通りの50かまどではないが、かなりの家が、川をはさんでほぼ相向う形で存在したことがわかる。
- ③ キメイドンの家に残る多くの文書によって、木材伐採で景気が良かった1,700年代の中頃には戸数が51戸にまで増えたことがわかっている。その後、宝暦・天明の両飢饉で人口・戸数ともに激減し、最低では16戸までに減ってしまった。

以上のことを考慮したうえで、「鱒谷の100かまど」の伝承を分析すると、この伝承は少なくとも三種類ないし、三つの次元での事柄を語っていることがわかる。

- (1) 象徴論的分析に従えば、この伝承は<自然⇔文化>、<山働き⇔農耕>、<水田⇔カノと呼ばれた焼畑>、<山⇔平地>、<東岸⇔西岸>などの二元的対立を含むところの、人間の営みやその性情と自然や環境との係わり合いについて。
- (2) 東岸側は様ざまな条件に恵まれているにもかかわらず、地質が軟弱でつねに危険にさらされており、居住するにも水田を開くにも適当でないことを教唆することにおいて。
- (3) 鱒谷ムラがたどってきた歴史的な変遷を人家の減少にまつわる話として伝えること。

以上のように、伝承の分析にはいくつもの視点が可能であることが鱒谷の100かまどの伝承は示してくれる。